森とともに生きて…森の民のくらし

森下　惠介（奈良山岳遺跡研究会会長）

約一万三千年前頃から、地球の気候と環境は大きく変わりました。氷河期は終了し、徐々に温暖化が進み、この自然環境の変化が地球上に人類繁栄の時代をもたらすことになりました。海水面の上昇により、大陸から隔離された日本列島には、ほぼ現在と同じ自然状況下で温帯森林が広がり、現在は水田や都市が広がる平野部も二千三百年ほど前までは、そのほとんどがうっそうとした森林でした。この列島に広がる森で生活した縄文人にとっては自然を学ぶことが生きることであり、彼らは日本の自然を最もよく知り、最大限にその恵みを活用した人々でした。

縄文人の衣食住

「縄文人はシカやイノシシを弓矢でしとめ、縄目のついた縄文土器で煮炊きし、地面を掘り下げて床とし、草ぶきの屋根をかけた竪穴住居に住んだ」というのが多くの人の縄文時代のイメージだと思います。中学校の歴史教科書にもそのように書かれています。また、縄文人の姿というのは、ひと昔前まで毛皮をまとった半裸体に復元されることが多かったのですが、今はさすがに毛皮のパンツをはいて狩りの獲物を担ぐ縄文人の姿は教科書にはのっていません（不思議なことに縄文時代より寒冷であるはずの氷河期の旧石器時代の狩人の想像図には未だに毛皮のパンツをはいているものがありますが…）。現在とほぼ同じ自然状況下で狩猟のシーズンでもある冬期の雪と寒さを考えると、毛皮のパンツだけでは、いくら頑丈な縄文人でも冬は越せません。骨製の縫い針や布片の出土によって、布製衣類の存在は実証され、縄文人の衣服は、縄文時代の東日本と同じナラ林地帯が広がる現在の北東アジアや北アメリカ北西海岸に住む諸民族の伝統的衣服のような長い、ゆったりとした上着とズボンであった可能性があり、獣皮や魚皮製の深靴といった防寒具の発達も当然考えられるところです。衣服には土偶にみられるような、渦紋や縄目の文様がついたものもあったと考えられています。

復元された縄文服
（福島県立博物館所蔵）

縄文時代の竪穴住居として長野県の遺跡（中期）の復元住居の写真は教科書では健在です。住居や墓地をもつ集落が出現して定住が始まるのは約六～七〇〇〇年前の早期末から前期初頭で、縄文時代の長さの半分に相当する草創期から早期の半ば頃までは季節的な遊動生活を送る半定住段階であったとされますので、家屋の出現、定住ということをメルクマールにすると縄文時代も分けて考える必要があるのかも知れません。

与助尾根遺跡の復元住居のような「地面を掘り下げて床とし、草ぶきの屋根をかけた竪穴住居に住んだ」というのがこれまでの常識ですが、竪穴住居には草葺きの他に屋根に土を積み上げるタイプ、竪穴の壁に細い柱を狭い間隔で建て、側壁をつくり屋根をのせる式のものもあり、中期以降には掘立柱建物も一般的で、住居だけでなく祭殿、貯蔵庫などの存在も想定されるようになってきています。青森県の遺跡などは前期中頃から中期末まで実に約一五〇〇年間も集落が続き、安定した居住が行われていたというのですから驚きです。

土屋根の復元竪穴住居（三内丸山遺跡）

「縄文人が弓矢でシカやイノシシをしとめる」といった記述があるように、弓矢の使用は縄文時代を特徴づける狩猟具です。弓矢が登場するとそれまでの石槍（有茎尖頭器・木葉型尖頭器）は姿を消して行きます。軽い矢じり（石鏃）は遠くまで飛び、獲物への的中率も槍に勝ります。寒冷期を代表する大型獣、ナウマンゾウが約二万年前までに、オオツノジカが約一万年前までに絶滅したとされ、東日本の落葉広葉樹林、（ブナ、ナラ、クヌギ林）西日本の照葉樹林（カシ、シイ林）にはシカやイノシシが数を増やします。こうした逃げ足の速い中小型獣を獲物とするには刻々変わる状況にすばやく対処できる弓矢は不可欠でした。

矢を放てば傷つく相手の苦しみは眼前には見えません。この飛道具の使用は人間の抑止力を失わせたとも言われており、弥生時代以降、人に向ける武器へと変質し、鉄砲の発明、果ては現代のボタンひとつで発射される核弾道ミサイルへと発展するとさえ言われていますが、縄文時代には幸いに未だ食料獲得の道具にとどまっているようです。

弓矢とともに狩りの方法を一新したのは犬です。犬は人よりも鼻も耳も利き、走るのも速く、人の指示で獲物を追いかけます。シカには瞬発力はありますが、持続力がないそうで、奈良公園のシカも追いかけまわされると心臓麻痺を起すことがあり、シカの角切りでも、この点には注意が払われているそうです。また、吉野の上北山村ではイノシシを猟犬に追わせ、犬に噛み付かせてイノシシを止めて捕るといった猟もかつてはあったそうです。縄文人は愛犬が死ぬと埋葬しており、犬は狩りのかけがえのないパートナーだったといえます。

豊かな森で

縄文人はシカやイノシシばかり食べて暮らしていたわけではありません。食べられるものはほとんどすべて食用に供しており、季節に応じて変化する食物は多種多様であったでしょうが、植物質食料が主体だったと考えられています。植物は逃げない食物であり、植物食は定住を促進します。食料となる植物が豊富で、食料を得やすい土地に人々はとどまり、食料を保存加工して貯蔵すれば、移動の必要も少なくなり、移動も困難になります。こうして大地に遺構として痕跡を残す住居ができ、森の中に集落が形づくられていきます。集団の定住の中では規制、約束事が必要で、そこからは呪術や儀礼なども生み出されます。

各地の森の植生の違いによって異なりますが、西日本に広がった照葉樹林の森では奈良市内の原植生を示すものとして、奈良市の木にもなっているイチイガシや春日山原始林の主体となっているシイ類の堅果（ナッツ類）はそのまま食べることができます。アクのあるカシ類も土器を使って煮沸したり、水さらしによって食用とすることが可能で、乾燥させれば保存も可能です。実りの差はあっても、毎年同じ木から食料入手が見込まれ、食料計画を立てることもでき、食料資源の保護という考えも発生します。春にはワラビ、ゼンマイ、コゴミなど山菜があると取りたくなり、秋にはドングリが落ちていれば、何気なく拾い、キノコを見つければなにやら取りたくなるというのも遠い縄文人のＤＮＡを私たちが受け継いでいるからなのでしょう。

ドングリやトチの実の貯蔵坑や水辺のアク抜き施設と見られる遺構は多く発見されており、石皿と磨り石といった石器は盛んな植物食の利用と重たい家財道具として定住化をものがたっています。中部地方中期の遺跡に多い打製石斧は土掘りの道具とみられ、優れたカロリー源であるヤマイモも利用されなかったはずはなく、その成長を促すためには石斧を使い森の一部が切り開かれたかも知れません。クリの花粉は縄文の集落遺跡周辺から大量に検出されることがあり、その根株が並んで発見される場合もあります。縄文前期頃から出土する実が大型化しはじめ、本来はブナ林であった三内丸山遺跡周辺は中期にはほとんどクリ林となり、クリ栽培が暮らしを支えていたとする意見もあります。

石皿、磨り石と縄文時代の石器

「縄目のついた縄文（縄紋）土器」の使用によって食料は煮沸され、そのままでは食用にならなかったものも食べられるようになり、食料の種類を増加させました。幼児や老人にも食べやすく、温かく柔らかい消化のよい食物によって人々の寿命は延びたことでしょう。縄文人には縄文時代前期以降、虫歯が一般的にみられ、この虫歯の顕著さが豊かな食料事情をものがたっているとも言われています。

縄文人は狩猟民というより、森がもたらす季節的に旬の多量な食料を計画的に効率よく得るといった自然の営みに従う食料採集民で、一部では、補足的に粗放な栽培やイノシシの子を一時的に飼育するといったキーピング行為なども行われていたと考えるのがよいようです。

人が自然に与えるインパクト、大地を傷つける行為はすでに縄文時代に食料獲得のための植生や土壌の改変として始まります。集落の周辺には人が維持、管理する人為的な生態系も形成され、自然環境の人為的撹乱も部分的には行われていますが、基本的には縄文人は自然の中でその一部として暮らしており、自然に適応、それを最大限に活用していたことは、縄文時代が一万年の長さにわたって続いたことがものがたっています。ただ、その豊かさには限界があったこともまた事実です。